



グラビア印刷創始時代の苦心

『グラビア 1/2 世紀』

(1) 天才辻本

史談会開催日

昭和42年(1967年) 2月24日

■ 語る人

宇多川庫吉 氏

辻本先生の話をお話をちょっとしましょう。辻本秀五郎先生は京都で本屋をやり、そこにいる時絵を習ったりして、なかなか相当勉強したらしいんです。辻本さんのおじいさんという人が京都で尊書堂という本屋をしておられて、辻本さんは17、8才、日清戦争の前だろうと思うんですが、今の東京・京橋の南鍋町という所に越してきたそうです。そこには最近まで帽子屋さんでタムラという店があったんですが、そこが辻本さん東京の店だったというわけです。

お兄さんが商売をしておられたんですが、そのお兄さんが亡くなった後、刷り版の砂目切りとか、風景や人物を描いたお土産用の絵草子屋さんをやったらしいんですね。自分で絵を習ったりしたのが役にたったのか、自分で石に書いて、それを販売したらしいんです。それを販売した人に田中さんという人がいて、その人が辻本さんの書いた物を風呂敷に包んで、方々へ卸して歩いたらしいんですね。

それからまた海軍のお偉い方が洋行するというような時は、黄海海戦の図がというような絵の評判がよくて、よく書かされたというようなことを言っておりました。そこまでは辻本さんからよく話を聞いておりました。

日露戦争の時分には、今の数寄屋橋阪急の側に工場があって、写真版をやっておりました。それで私が本社にやっかいになりましたのは、日露戦争が終わった39年頃だったと思います。その時は写真版の印刷を盛んにやっておりました。ビクトリアの機械が3台あって、動力はガスエンジンでやっておりました。

＝グラビア印刷は、欧米では早くから利用されて、新聞の絵付録や書籍、雑誌に挿入の版画などを印刷するようになり、大正3年(1914年)の夏勃発した第一次世界大戦によって続出した各種の画

報類はみな争ってこの版式を採用した。

こうして欧米の出版界を風靡し、印刷文化に革命を巻き起こしたグラビア版は、わが国の業者間にも大きな関心と呼んでいたが、その頃はまだ石版、写真銅板、三色版、ロコタイプ版やオフセット印刷で満足していたので、1台のグラビア印刷機でも輸入して研究しようとするものはなかった。

この頃、東京・大森に研究所を設立して、多年三色版やロコタイプなど写真応用の美術印刷をしていた辻本写真工芸社主の辻本秀五郎だけが、このグラビア版の特徴に注目しチェコスロバキアのクリツチェが大成した凹版の機構や写真焼付けの原理と技術を研究し、大正7年（1818年）以来、日夜寝食を忘れてこれに没頭していた。彼は天才的な芸術家であり、また発明狂でもあった。南画をよくし、てん刻もやるという器用な人物で、長兄の死後、その業を継いで東京・数寄屋橋に「辻本写真工芸社」を経営して、石版印刷、写真製版、ついで三色版を創業した。彼がグラビア印刷の研究を始めた大正7年頃には世界大戦の画報や新聞のグラビア版付録などがわが国へもどんどん流れ込んできたものである。そしてそれらの印刷効果が業界人を感動させた。辻本は人一倍興奮し気が狂ったようにグラビア版の研究に専念した。

(2) 霧の中

私はその辻本の工場でしばらく修行しておりました。そうこうしているうちに、20歳か21歳の時に、今の田村町の交差点のちょっと先に東洋写真製版所というのがありまして、そこでは現在もご健在の吉田さんが技術の面をやっておりました。その吉田さんが急に辞められて、東洋写真製版では困っておられました。国華社のロコタイプなんかを印刷していた関係で、写真の撮影やらいろいろ国華社の方から頼まれていたんでしょう。詳しい事は私も若くて判りませんでした。そこへ行って4、5年間やっておりました。

また辞められた吉田さんは鎌倉河岸に工場をお建てになったんですが、私はそこへビクトリアの機械が入った時、以前それを扱ったことがあるのでお手伝いしたことがあるんです。

—朝日新聞がグラビア印刷の第一歩を踏み出したのは大正10年1月2日付けの本紙に遡る。新年付録として添付された週間画報「朝

日グラフィック」第1号（本紙1ページ大）がそれである。このグラビア版刷りの画報こそは、わが国では、初めてのグラビア印刷技術と、国産による輪転印刷機によって、初めて刷り上げられた歴史的なものであった。それだけに同業関係ばかりでなく、世間をアッと驚かせた。その頃わが国の印刷業界ではまだ未開の境地とされていたグラビア印刷を、いち早く新聞制作の中に取り入れ、報道と娯楽の両面の分野に新生面を開いたからである…。

…その頃辻本工芸社から国華社へ派遣していた宇田川庫吉という、製版にかけては"名人芸"と言われるほどの腕を持った行員を、無理矢理に連れ戻して研究陣に加えたりしたが、何分にも大戦下ではカタログは入手出来ても、機械は輸入出来ず、ましてインキ類もどんなものを使って良いのか、全く霧の中で物を探る思いだった。

＝ 朝日新聞社の付録は9年の12月に印刷して10年の1月2日に売り出したわけです。その1年、2年前には手刷りで出来るようになっていたわけですが、それは我々が7年から9年の3年にかかってやったようなわけです。

印刷機械のほうは、蒲田に小川鉄工というのがあって、そこで試験用の機械を作っていたんですが、それを真似て作ったのが上手くいったので有頂天になって、これで一人前になったと言っていたもんですから、その小川に頼みました。蒲田に飛行学校というのがあって、その学校の工場の機械を使って、一生懸命に作ったわけです。

マスコミの戦いは創始者の新聞では狂気以上だったろう。辻本の天才はこうした狂気同士の巡りあいから開花した。庫吉は機械を入れる工場の監督もやらねばならず寝食を忘れる有り様だった。機械が大森白田坂の工場に据えられ、重役立会いのもとで運転を始めると、突然発火した。朝日の重役にはショックだったが、重役はその他の人々を激励して研究を続けさせた。…印刷と製版が追い追いつ追われつで1週間目に納期の来る大部数のものを、初めからオンボロ機械では無理な仕事で、全員がクタクタに疲れてしまい、3回の納品で取り止めてもらった。とにかく朝日は毎日に勝ったから、あとはドイツ製のグラビア機械を輸入するということになった…

(3) テンヤワンヤ

日露戦争に従軍した大塚徳三郎さんという人が小川一真の写真館におりました。この人は宮内省というか、両陛下の写真というのに

カーボンティッシュを使っていて、カーボンティッシュの扱いは良く慣れておりました。私は国華社に入ってから、大塚さんにカーボンティッシュのことで伺ったことがございます。「どうも仕上げがうまくいかない」と言うと「それは長く水につけ過ぎるからだ」と言う。それを聞いてきた後に、水にちょっとつけて、ティッシュが伸びきるかきらないうちにちょっと貼れば、容易く転写できる。ということで、これはやはり人には聞くもんだと思いましたね。

朝日新聞をやったときは、最初3週間だけ大森で印刷したんですが、機械は半分木製、半分鉄製、それに自転車のチェーンなんかを巻きつけてあるんですね。危ないなあ、どうかなあと思っている内にパーンと切れたりして、よく怪我しなかったと思うくらいでしたね。版もかまぼこを二つ抱き合わせたようなものでしたから、どうしてもその継ぎ目に筋が出る。印刷していると、バカン、バカンとそこヘインクは入っちゃうし、苦労しましたよ、それは…。

その当時、60万刷っていましたね。期間は短いし、それに自分たちは絵葉書くらいしか印刷したことがないんですから、紙の量を見ただけで大抵のまれたりなんかしましてね。物置を急に作るやら、それにまた紙は大きい巻取りで、機械は半裁ときてるから真中で切らなきゃならない。それは製紙会社に頼めると思っていたのが、製紙会社でも到底間に合わない、と言う。それじゃ仕方ないから4人ぐらいで毎日毎日のこぎりで切ったもんです。全くばかげた話です、今考えてみれば。ささくれが出来た紙で印刷していると、そこから切れちゃうんですね。それでまた随分難儀しました。

2日発行のものを元旦に刷り上げると、もう次の原稿がきて、我々はもう何週間も帰れない状態でしたね。ひと寝入り寝ろって言うんですが、そうして労わってくれるのはいいが、寝たと思ったら直ぐ版が減っちゃった、とこうくるんです。版が減るのは無理ないですよ、インクがアスファルトでないんですから。俵に入っているのを溶かして使ったんですが、それも思ったより量があるんですね。もうみんな真っ黒けになり、大阪からは発送の係長が来て泊り込んでいる。誤魔かす訳にはいかない。負ける訳にはいかない、相手が新聞ですから。ヘトヘトになっちゃって、それで見るに見かねて、それじゃ暫くオフセットでやろうということになり、大阪で全判の機械を9台持っていた市田オフセットに手伝ってもらった訳です。その間に、小西作太郎さん（元朝日新聞取締役）が買いに行ったわけですね。

＝写真がないというのは、閃光粉使用の頃は、シャッターを開くと同時にポーンと一発、強烈なフラッシュとともに吹き上げるキ



ノコ形の白煙…気化したインキ溶剤のガソリンが、空気中に混和されている工場内で、ボンとやろうものならそれこそ一大事である。そんな事情もあって写真もとれず、歴史的なこの辻本機も後世に伝えるありし日の姿を残すことが出来なかったものと推測される。

(4) 大阪行

ちょうど3号まで大阪で印刷して、その後機械を両面刷りに直して大阪へ持ち込んだわけです。3号といっても毎週ですから、ヘトヘトになりましたね。それで今度は両面刷りにして持ってこい、ということから両面刷りにしたようなわけです。それで向こうへ持っていったところが、向こうの人が笑うんですね、仕上げが汚いとか何とか…。

その時には、私と辻本の息子さんが準備のために先に行ったんですが、ちょうど朝日の慰安会があって、我々も出たんですが当時はグラビアは珍しいものですから、そこでは優遇されましたがね。

—大阪本社のグラビア印刷に充てられた工場は、南北に細長い、蔵屋敷時代の倉庫で、今は埋め立てられたが、近年まで新大阪ホテルとの間にあった掘割に沿って、大正5年の新社屋落成後も、ポツンと残されていた旧印刷工場である。

2月の初め、辻本秀五郎は、一門の越島善次、宇田川庫吉、佐藤清次、上田鉄太郎、辻本三樹之助、松下清常らを引き連れて大阪へ乗り込んできた。そして、機械が到着するとともに、新たに10人の行員を雇い入れ、昼夜兼行でグラビア輪転機2台の組立てに取り掛かった。機械は4月末には完成、テストも終わったので、再び「グラヒック」をグラビア刷りにした。5月8日付けの「皇太子殿下欧州ご訪問の御写真」を収録した「朝日グラフィカ」第19号は、本社工場でのグラビア印刷機による最初の印刷だったのである。

ドクターは、いろいろ版を作って膠のローラーで印刷しても、角が痛んでくるんですよ、数多く刷れば。それを金でこすったらもう大変だと思っていたんです。ところがやってみると存外良かったんです。やってみると言ったって材料はないんですが、のこぎりみたいなものでやったんです。実際のこぎりを田舎まで頼みに行きましてよ。私は小さい時分に木版をやっていたんですが、版画を彫っていると、飛ばしちゃうことがあるんですね、そうするとそこに穴を開



けてトントンと埋めて、それをまた小さいのこぎりで削ったものです。それを思い出して、木版用の小刀を買ってきたわけです。その峰を使ってこすったんです。今の安全剃刀より薄いものですから、そりゃとても上等なんですよ。それでこれはもう鋼でなければ駄目だということで、調布あたりまで天気の良い日に行ったものです。それで一番薄くやってくれといっても厚いものですよ、今と比べれば。作ってはもらったが使い物にはなりませんでしたね。そういうところに人知れず苦労がありましたよ。

大阪へ行ってもインキのほうは良くならなかったですね。大体、こういうものだろうという予想はついていたので、山本インキさんに頼んで作ってもらったわけです。いろいろやってくれたんですが、深い版が出来たりするとガソリンを余計入れるし、またベンゾールを入れたりするものだから、静電気で火災を起こしたりしましてね。これはせっかく大阪まで来て、しっぽを巻いて帰らなけりゃならないかと思いましたが、そしたら当時の局長だった田口さんなんかやれやれというんですね。砂をぶっかけたり、水かけちゃった機械を掃除して、またやったりしましてね。辻本はその間に、ティッシュへ網を焼き込むことをやったわけです。

(5) 功 勞 賞

世界大戦が終わり、外国製品がドンドン輸入されるようになると、国産の辻本機は影が薄くならざるを得ない。それにしても、辻本機は日本のグラビア印刷の開拓者としての榮譽を十分讃えられるべきであり、朝日新聞も、グラビア画報を世に出した先駆的役割を果たしたことは、わが国印刷界の歴史に一基の大きな金字塔を打ち立てたわけである。

朝日新聞対象 10 年 12 月 25 日付け朝刊第 7 面には次のような辻本秀五郎自身の苦心談を載せている。◇ 近来でこそ色々な書物や雑誌等に斯術に関する紹介もされ、又その方法に就いても訳述されてありますが、併し乍ら欧米でも尚此の技術に就いては現今でもある程度迄は秘密にして居る様でありますから、私が研究に着手した当時は其大体を窺うことさえ不可能でありました。…それにこの戦争がいつ終息するか見当がつかず、いつまでも便々と待つて居ると云う事は誠に不甲斐なく思われましたので、茲に決心を致しまして一切を自給でやって見よう、是れも我邦の為に幾分気を吐く会心の事ではあるまいかと、そこで、先ず大体の研究方針を定めまして実験



に着手しました。総ての理論は既に公に知られて居る事ですが、寒暖や湿度の関係で非常に変化の甚しい材料を取扱うため製版の設備について甚しき失敗も多く、今考えると失笑する様な無駄を致しましたが、とも角長い苦心の結果一切を自給により今日の成績を見るに至りました。

その後、辻本はヨハネスの三裁判の機械を買いまして、それは朝日の仕事の功労賞みたいなもので、いろいろお金を融通してくれたりで、買えたんだと思いますがね。そのヨハネスの三裁判の機械は最近まで大日本にありましたがね。…

この時分には、スクリーンも三裁判のスクリーンが入り、随分良くなっていましたが、それでも辻本は貧乏していたもので、焼き付けをすと言ったって、薬が買えないんですよ。それで太陽光線で焼いて、焼けたかどうかわからないなんてね。POP という紙があって、紙を重ねて仮の露出計のようなものを作って、色を見たようなこともありましたね。そういうような事で情けない時代でした。

コロタイプは、さっき話が変になっちゃったけれど、私は10年間国華社に行ってやっておりましたが、辻本先生はいろいろ野心があってなざるもんですから、国華社の給料だけでは具合悪く、それでまあいろいろなものに手をかけていたわけなんです。グラビアで紙フィルムを刷って、それでジェプシーといって、鏡の反射を利用して焼くという子供のおもちゃなんです、それをデパートなんかで売っていました。それも戦争で材料がなくなって、長続きしませんでしたね。

その後にオフセットとグラビアをコンビでやる研究にかかれて、グラビア・オフセットと言うのかな、グラビア版とゴム版で両面に刷るといような奇抜な考えも持っていましたね。

随分いろいろな事をやりましたが、うまくいかなかったのは、運が悪かったと言うよりほかありませんね。



(6) この道

その頃、弁理士をしていた人で、東大の法科を出た人なんです、この人が印刷が好きで、しきりにグラビアを始めたがっていました。それで自分に家に倉庫というか、別棟をこしらえて、印刷機を入れ、

職人一人ぐらいを使ってとうとう本格的にやり始めたんですね。ちょうど御木本真珠から、カタログを作ってくれと言う話があったとかで、私が写真を撮りにいきました。それで真珠見本なんか立派なものを作っていました。その人は早く亡くなってしまいましたが、その様な人もいましたね。

また共同印刷の大争議ありましたね、その時に講談社は大困りで、東京中の大きな印刷所へ仕事をばらまいたんですが、「講談倶楽部」だけは厚くて、どこにも持っていく所が無かったんですね。それを報知新聞の輪転機を使って、ちょっと製本がややこしいがやってみようと引受けたんです。それには芝あたりの印刷屋さん、製本屋さんにも大分骨を折ってもらいましたがね。それで講談社の前社長が非常に恩にきまして、辻本の言う事なら色々聞いてくれたものです。そういうことがありまして、私も1年間くらい「講談倶楽部」の印刷名義人になっていましたね…。

昭和3年頃に私は八裁の機械でもって、独立して飯食おうとしたんだからどうかと思うのだが、その代り上手くいかなくても、もとかかかっていないんだから大したことないと思っていましたね。景気がいいということで何もかもやっていくと失敗するでしょう、辻本にしる誰にしる。どうもなかなか商売を代えるということは難しいのであまりそういう事を考えないでやってきたわけですが、まあグラビアを我々が何年かやってきたのは、ちょうど時期が良かったんではないかと思うんです。

例えば今日こうやって皆さんにお目にかかって話を出来るのも、商売としては不成功だったんですが、50年前からグラビアを初めてやっていたからですしねえ。

＝グラビアの発明者カール・クリツェが布地印刷用の棒染機の機械を取り入れて、グラビア機械が出来上がり、そのため規則正しく並列した細かい目十字スクリーンを、肉もちとしてドクター操作に耐える版と機械、すなわち今日のロトグラビアが出来上がった。そしてその基本的な構造はその当時からほとんど変わっていないが、現在では精度の向上、高速量産、自動紙継ぎ、自動張力制御、自動見当合わせ等の装置を備えて、他の版式の追従を許さない最新式の機械となっているが、30～40年前の姿のままの機械も現在稼働している。原稿としては写真がほとんどである。そのトーンを最も忠実に再現し、豊富なグラデーションを再現する方法がグラビア印刷である。時代感覚の要求に応じ、高速輪転印刷機の印刷能力はラジオやテレビに追従してニュース性のあるスピーディな画報を多



数複製・量産頒布する目的に合致している点からみて、グラビア印刷は他の印刷方式に比べて最も適し、今後ますます利用される傾向が強くなってきているといえるだろう。日本のグラビア印刷はここに半世紀の歴史を記してきたのである。

